

# 令和2年度「学び合い」 第1回「英語」授業研究より

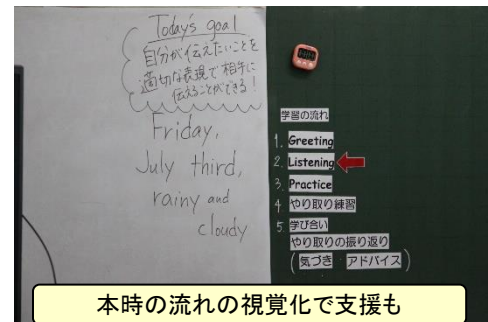
7月3日(金)、第四中学校にて、第1回校内授業研の「英語」の授業が行われました。協議会では、三原市教育委員会村上直子指導主事から、「学び合い」の活動を行う際の生徒の状況の見取り方や、英語の学び方、小中連携について指導助言をいただきました。正しく、楽しいやり方をすればついてくる生徒たちだからこそ、見通しをもたせたり、ユニバーサルデザインでの視覚的支援を充実させたりする工夫が重要。学びをよりよいものにするためにも、交流時は班の形、振り返りの時は戻すなど、作業と聞く時のメリハリをつけていくよう、助言をいただきました。



「学び合い」で確認しながら活動できる



良い表情で活動する姿



本時の流れの視覚化で支援も

## 協議会のまとめ

### 1. 今日の授業から ～「学び合いの手法」について～

- 新型コロナウイルスへの対策と、「学び合い」の両立の難しさをどうするか。制約が多い中での難しさ。  
→今回の授業では、4人班で机の中央に間隔をとり、ダイヤモンド型で学び合いの環境づくりを行った。  
→席移動を伴わない向かい合う形でのペア活動は各校で取り入れられている手法である。
- 本時の目標が「自分が伝えたいことを適切な表現で相手に伝えることができる」であったが、意欲的に会話にチャレンジしている生徒がほとんどであった。それだけではなく、会話を続けていく中で例文にない新しい表現がしたいという意欲が生まれている生徒もいた。
- 評価の視点が明確になれば、生徒同士の活動が取り組みやすいものになる。
- 個人・学年に応じた配慮ができれば、授業の流れがスムーズになる。

### 2. 村上直子指導主事の指導助言から

- 「みんなができること」も大事だが、個々のレベルに合わせた支援が必要である。しんどい生徒が活動の中で1つでも笑顔になれる場を作り出せばよい。
- 英語では「音声・話す内容」の幅を広げていくことが先、「文章校正」で文法を学ぶことが後。
- 「英語が好き」、「会話がしたい」という環境づくりを粘り強く行っていくことが大切。生徒の発言の中に文法的な間違いがあったとして、それをすぐに正してしまうと生徒の意欲につながらない。生徒の発言に対する教員の反応の中で、正しい表現を生徒に伝えていく姿勢が良い。そこから気付きを利用した学びが生まれ、コミュニケーション能力や英語に向かう意欲が高められていく。失敗を活かしていく教員の姿勢が求められる。「これでもわかってくれるんか、じゃあやってみようかな」と生徒が思えれば◎。
- 生徒の動作にメリハリをつけると、授業の理解度が深まる。「見る」「聞く」「書く」の明確化を。
- 生徒の視線に気がついた板書構成ができると良い。
- ICTが広がっている今、目を見て直接コミュニケーションがとれる楽しさは、英語科でこそ発見できる。